

方向

第八九号 一九八八年一〇月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

孤山雁信

一赤谷明海書翰集一 (補遺)

原田憲雄編

★1958.9.22.原田憲雄宛。手紙。封筒。住所、京都府八幡町八幡莊源氏垣法園寺内。

学期はじめのあわただしさが少しおさまってきたでしょうか、先日は町重な御手紙をいただき、又、方向誌御恵与下さって有難うございます。例によって怠惰な小生、折角骨を刻んでの労作を送っていたく資格がありませんが、御厚意に対して熱読せねばとの気持だけはおこしています。果たしてどんなことになるやら、いやはや頼りない友人をもちたまいにしなと云ったところ。

ところで先般御来駕の節撮しました写真二葉同封いたしました。余り感心した出来栄えではなく、又焼付けの時の汚点などが出ていますが、記念の役にぐらいいは立つでしょう。この中の白萩、今は色さめ、代りに赤い萩のいろが濃くなってきました。すでにコスモスの花がダリヤに代って咲き、秋はいよいよ気はいいがはつきりしてきました。

今日は家内が日直で不在。ゆっくりと一人だけの日曜を楽しんでいます。子供の声が遠くからきこえてきます。

九月二十一日正午 明海 憲雄大兄御机下

★1960.10.1.同宛。葉書。平安学園より。

過般再度に亘って面倒な御依頼をしてお手数をおかけしました。方向第九号有難うございます。まだ内容を拝見し

ていませんが、よくもまあ続くものだ。と御努力の程感嘆の外ありません。いろいろ多忙な中での労作、とても小

昨夜は市馳走うりまで、その節酔眼

ぶらぶら写してきて、右衛門さんの筆跡を

眺めて、いさか、いかに判読できません

取敢ず

鑽沙草只三分許

跨樹霞纒半段餘

印は断定できず、一字

と見て、沙を鑽る草は只三分許、樹を跨

ぐ、霞は纒に半段余りと読み下し

たが、いさか、いかにサッパリです、謎を解く

生などには真似はできません、い

ずれゆつくりと読ましていただき

ます、ごたごた混雑した職員室で

とりあえず御礼の筆をとりました、

身体の方、気をつけて下さい、

十月一日

★1983.4.11 近江作・宇佐見文子

氏宛。手紙。墨書。住所、宇治市

伊勢田町中山七三

昨夜は御馳走までした、その節

酔眼ながら写してきたへ中村へ吉

右衛門さんの筆跡を眺めています

が、なかなか判読できません

鑽沙草只三分許

カギは菅原伝授手習鑑かと思ひますか
許にふいので調べられませんか
甚だおはすかし、次第ですがお笑いぐさ
までにお返る申あげます

四月十一日 赤谷生

近江作様

京都市東山区祇園町

南側五七〇

近江作様

605-□□



跨樹竈纒半段餘

、印は断定できない字

と見て「沙を鑽る草は只三分許」と

樹を跨ぐの竈は纒に半段余り」と

読み下したが何の事かさっぱりで

す 謎を解くカギは菅原伝授手習

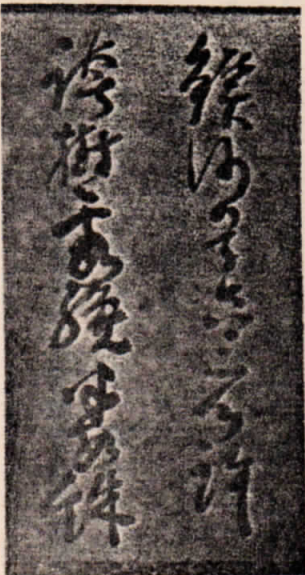
鑑かと思いますが 手許にないの

で調べられません 右の程度で

甚だおはすかしい次第ですがお笑

いぐさまでに御返事申しあげます

四月十一日 赤谷生 近江作様



※この前日の十日、祇園の料理屋近江作で赤谷、森田曠平、杉田莊作、上羽正一の四君と原田が夕食をともした。その折、女將の宇佐見文子氏が、所藏の吉右衛門の筆跡を持ち出し読んでほしいと頼んだのを、赤谷君が引き受けての返事である。この手紙を貸与された宇佐見氏に感謝する。なお手紙はすでにお返しした。

占

紋綵

暦月

一李 清照 (四六) 一

1988.9.18.

原 田 憲 雄

寂寞深閨、

ひそけき奥のへや

柔腸一寸愁千縷、

一寸のはらわたに 千すちの愁ひ

惜春春去、

春を惜しめと春ゆきぬ

幾点催花雨、

いくつぶの花さそふ雨

倚遍闌干、

欄干にながめつくし

祇是无情緒、

あはれただ つれなきのみぞ

人何処、

ひといつこ

連天衰草、

天につらなる草はらに

望断帰来路、

のぞみたゆ 帰ります路

双調、四十一字。前段、四句、三仄韻。後段、五句、四仄韻。ただし、この作の後段、第四句の、韻を踏むべき文字の「草」は、他の字の纏・去・雨・緒・処・路と韻が合わない。これについては後に述べる。題を「閨思」とし「閨怨」とするものがある。

五代の詞人孫光憲が「河伝」に「花ちり、とのぐもる、謝家の池殿。ひそかに春ふけぬ、みどりの眉ひそめうちしづみ、ぬれしたもと、このころ知るひとぞなき」とうたうが、その寂寞を一句に凝縮したような、

ひそけき奥のへや

である。閨は婦人のへや。

一寸のはらわたに 千すちの愁ひ

へやの主の柔らかなはらわたが、ずたずたに引き裂かれ、一寸ずつの断片に、それぞれ千筋の愁いがつまっている。直訳すると怪奇小説じみだが、中国の詩文のなかで練磨され、ねりぎぬの束のように透明な、かなしみの表現となっている。

春を惜しめど春ゆきぬ

春は、季節の春であるとともに、主の女性の青春でもあるだろう。そんなわびしさにさらに追い打ちをかけて、

いくつぶか 花さそう雨

花さそう、催花、とは花の咲くのをうながす意で、晩春のこの作にはふさわしくないと考え、「催」を「描」の誤りと見る説がある。それなら、残った花もうちくたく、というほどの意。分かり易くはなるが、たぶんそう

ではなく、ここの「催」は「催帰」で、ゆく春の後を追ってさあ帰ろうと、雨が、花にさそいかけている、というのであろう。韓愈の「同遊に贈る」という詩に「帰ろうとせきたてるのは日がまだ西に傾きもせぬうちだ」の句があり、その「せきたてる」の催がここにうつされているようだ。韓の詩は「城南に遊ぶ 十六首」という聯作の一つ。李清照が韓愈の詩文を重んじたことは「金石録後序」によって知られる。催字がおちつかぬ要素をふくみはするが、この句の効果はすばらしい。以上前段。

欄干にながめつくし

毎日々々楼上にのぼり、欄干のどんなに小さな部分だって、もたれなかった処はない。もたれるのは眺めるため、眺めるのは、あのひとが帰ってきはせぬかと思つてのこと。

あはれただ つれなきのみぞ

でももう、なんのおもしろさも楽しみも、ありはしない。「つれなきのみぞ」と訳した「無情緒」には韓愈のさきの聯作の「多情思」（風折花枝）の影がさしていよう。

ひといつこ

わたしのかなしみなんぞ知らぬげに、あのひとはどこをほつついているのだろう。

天につらなる草はらに

草はらと訳した「衰草」を、あるテキストが芳草とするのは、衰えた草では、前段の春景色と合わないと考えたため、またあるテキストが芳樹とするのは、先に触れたように、草では韻が合わないためであろう。韻律に

きびしい彼女の作としては確かにおかしいが、前段が春だから後段が秋であっていけない、というのはとらわれすぎではないだろうか。わたしの解釈なら衰であっても通るだろう。韻のあわぬことは問題ながら、芳草、芳樹ともに衰草の字面には、はるかに劣る。

のぞみたゆ帰ります路

衰草が眺望を断ち切っている。それはあの人の帰りを待つわたしの望みを断ち切るように。

ある批評家が「草は長途に満ち、情人帰らず、空しく寸腸を攪するのみ」といい、「涙この中に尽く」というのはよく当り、またある批評に「情と調べとならびに勝れ、神韻悠然」というのも、過褒ではない。

富士 正晴 と エリック・サティ

1933. 9. 20.

原田憲雄

雑誌『VIKING』第四五三号、前田純敬氏の「甲・富士正晴」という文章に、次ぎの一節がある。

エリック・サティは今から十余年前、パリで突如復権した。一部にブームが起り、そのブームはたちまち日本に伝播し、これも一部の人々に急速にサティ・シンドロームとでも言うべき現象を生じさせた。あらゆる奇矯なものが好きであった富士は、今度はたちまちそれに感応した。しかし、いかに新奇であっても、富士には富士独特の選択の基準があるはずだから、サティが今度は容易に富士の心を捉えたということはいかにも不審なことである。再び私の想像になるが、富士のこの最後のサティ受容の奇矯さのなかには久坂が介入しているのではないかとの疑問がある。私の考えでは、富士の心の中に沈んでいた「これは昔、久坂が俺

に教えてくれたものだ」という記憶が、今度は不意に激しい涙となって心の中に湧き上ったではないかとの思ひがある。

文中の「思ひ」は弔意であり、富士さんの死を悼む氏の心情に対しては共感を捧げたいが、「疑問」は事実に関すること、後に引くべき葛藤は断っておくほうがよいかと案ずるので、一筆。

富士は、一九三五年九月に「人形の午後」と題する詩を作り、その十月発行の雑誌『三人』第一一号に載せた。五月書房版『富士正晴詩集』三七頁、泰流社版『富士正晴詩集』八二頁にも収め、この詩には「Erik Satieに」という献辞がついている。

富士の師である竹内勝太郎が一九三〇年にアトリエ社から出した『現代仏蘭西の四つの顔』は二〇世紀フランスの詩・絵画・音楽・劇についての評論集。音楽のところドビュッシー、サティ、ストラヴィンスキー、ラベルなどについて語り、次ぎのような一節がある。

単純で直截簡明で、狼のやうな野獸的な骨つばさを愛したエリツク・サティ (Erik Satie) が晩年のドビュッシーを嫌つたのはこの理由に依るのであらう。(三九頁)

千九百十七年十一月にロランがそのエッセイを書いた時には此の有名な世界の市民はまだエリツク・サティの名を知らなかつた。サティこそは彼が要求してゐた筈の音楽家であり、光と笑と明るい智慧との仏蘭西の天才であつた。千九百十七年から二十四年に至る七年間、ジャン・コクトオの云ふように遅咲きの短い春ではあつたが、彼は珍しく生き生きとした新しい花を開いた。千九百十七年の春にコクトオとの共作になる彼の

「バラアド」上演の華々しい成功——限りない悪罵と怒号をもたらした処の——は仏蘭西近代音楽に全く新しい一つの道を開いたのである。(四一頁)

竹内の著書に先んじ一九二七年アルスから刊行された小松耕輔『現代仏蘭西音楽』にも「現代音楽の先駆者エリック・サティ」の一章があり、富士の本棚でも見たように思う。しかし富士がサティを知ったのは、竹内から直接、または『現代仏蘭西の四つの顔』を通じてであろう。サティの音楽が一九三五年に既にレコード化されていたかどうかは知らないが、「人形の午後」は、彼の作品を聞いた印象から生れたもののように感じられる。

サティのほかにストラヴィンスキーやデュカなども好きだというのを、富士から聞いたことがある。作品を聞かずに音楽家を好きだといったとは、あの人のばあい考えにくい。

富士正晴が久坂葉子にエリック・サティを教えることがあっても、久坂が富士に教えたというようなことは、事実として成り立つまい、とわたしは思う。

前田氏が、拙文執筆の趣旨を寛容されるならば、幸いである。

高橋達明 訳 『ラマルク 動物折口 当子』 1989.9.25. 原田憲雄

むかしある雑誌からのまれ、植物園について雑文を書いたことがある。植物園は植物を観察する場所でありたく運動場である必要はなからう、とか、身近なところに見られる雑草や野草の名前を子供達でも学びうる配慮がほしい、といった思い付きを記しただけのものだが、読んだ弟の禹雄がいうことには「『植物』とは何かとい

うことが植物園のどこにも説明してないな。動物園でもそうだ。科学的とは言にくいのではないか」いわれてみるとなるほどと思い、われわれの間では定義に骨を折る習慣の乏しいことを痛感した。その点ヨーロッパ人の生活には、定義付けが日常化しているらしい。早呑み込みはするが、互いに呑み込んだ内容が違うために無駄ばかりするのは、熊さん八さんの間だけでなく、学術会議や国会のセンセイ方の間でも変わりが無いらしい。話しが始めからそれてしまったが、生物を植物と動物に分け、それぞれを定義し、動物をさらに分類し、分類の根拠を指し示し、動物の体系を整然と語ったこの名著を、友人の翻訳で読みえたことにつき、少し書き留める。

進化論の祖ラマルク（一七四四—一八二九）の『動物哲学』と『共和暦八年花月二日に述べられた開講講義』の全訳で一頁二段、段二一行、行二七字で四九〇頁。解説が五九頁で木村陽二郎氏の「ラマルク、人と業績」と訳者の「『動物哲学』の成立」。一〇・五ポの活字で一段にゆったり組んだら五〇〇頁で三巻くらいになりそうな大冊である。

『動物哲学』は三部からなり、第一部は、動物の自然誌、その形質、類縁、体制、分類、網区分、種についての考察。第二部は、生命の物理的原因、生命が存在するために要求される条件、生命の運動の刺激力、生命を所する物体にあたえられる能力、生命がこれらの物体に存在することの成果についての考察。第三部は、感性の物理的原因、活動の産出力を構成する原因、最後に、様々の動物に観察される知性の行為を引き起こす原因についての考察。そのいちいちの内容は目次に要約してあり、ラマルクの文章は「悪文」だというが、訳筆がきびきびしているせいか、反復は多くても、くどくて読むにたえぬというものではない。第一部だけは文庫本になって

普及するが、日本語の全訳はこれが最初だそうである。

「文学は人間の知性のすばらしい成果であって……情念と思考を日常の圏外に拉し去る、高貴で崇高な技法である」といふことばを第三部から引き、訳者は解説で次ぎのように言う。

動物学の書物にこのような文学論を見出せば、だれしも、少なからぬ驚きと興味をおぼえるにちがいない。

動物について詩を語ることはできても、動物が詩を語ることはないからである。この常識はむろん、人間を動物一般から区別することによって成立している。ラマルクも人間という言葉を使っているし、人間を語っているのに相違はないけれども、『動物哲学』の文学論は、ラマルクが人間を動物と、詩をもつ唯一の動物とみなしていることに由来する。

ラマルクの『動物哲学』が刊行されて約一八〇年、自然科学の進歩めざましく、『動物哲学』の学説のなかには通用しなくなった部分も少なくないのだろうとは察するが、人間をも含めた動物全体を概観する、こんなニスケールの大きい理論は、こんにちも少なくないのではなからうか。なにしろ大冊だから通読するのは大変だが、読めば動物哲学だけでなく、新しい学問を作り上げようとするラマルク、また当時の思想界全般の熱気にみちた雰囲気もうかがわれ、「私が一本の喬木、灌木、多年生草本を見ると、私の目には、単一体の植物ではなくて、たがいに支えあって生き、すべてが一つの共通の生命を共にしている多数の植物を見ているわけである」といったかれの言葉が納得される。

「生命を所有しているどの物体について考察してみても、生命は、次ぎの三つの対象の間に存在する諸關係に

もっぱら由来している。すなわち、この物体のある適当な様態に置かれた、含むものとしての諸部位、そこで運動する、含まれるものである流動体、そして、運動および運動にもたらされる変化の刺激因である」と第二部第二章でいい、その刺激を、第三部第四章で、存在感覚すなわち内的感性に移し、「この感性は、微細な流動体のひきおこしうる全般的震動を介して、一つの威力を構成する能力をもっている。この威力が動物に自ら運動と活動を生み出す作用力を与える」という。この威力は仏典にいう「神通力」と、震動は「六種震動」と違いつつながっているように察せられる。いまずぐ理論化することはむづかしいが、わたしの「法華経巡礼」が無事終了するころには、曲りなりにも説明ができるようになるかもしれない。

毛 虫 の 舞 踏 △△

1933. 9. 18.

原 田 慶

雨の多い夏だった。クルミの木を見上げると、ずいぶん毛虫に食べられて、透明な網になった葉がめだつ。梢の方ほど白いスクリーンのようなものが多い。高くて、薬剤の散布も届かないからである。クルミにはよく虫がつくと聞いているが、それに加えて、木の位置が隣家の二階に面し、そこで夜遅くまで仕事をする明りがこの木を照らすためらしい。

細かい葉脈をきれいに残し、葉の形をそのままに見せて食べているのは、たぶん、カレハガの一種の幼虫である。中央の太い葉脈だけ残して、枝をつんつん尖らせるように食べ尽くしているのは、イラガの幼虫である。イ

ラガの幼虫は、ずいぶんいろいろな木につく毒毛虫で、刺されると、ズキンと、何ともいえない痛みである。この庭でよくイラガのつくのは、クルミ、カキ、タラヨウ、イチヨウ、モミジ、クス、ハクモクレン、モクセイ、ナツメ、サクラ、サンシュユ、ヤナギ、バシヨウ、ムクロジユであるが、なんといってもクルミがいちばん多い。今年も、カレハガの仲間と思われるのが、異常発生した。毛虫や芋虫というのは、図鑑で調べても、よくわからない。成虫は、カラーの図版や写真で出ているが、幼虫についてはほとんどが言葉の説明だけで、どのような植物に寄生するかということも、くわしくは書かれていない。

緋おどしのよろいをつけたように、腰細のきりっとした毛虫がいる。角が二本あって、雑草や木の葉の裏にいてもよくめだつ。その色に敵を威嚇する意味があるのだろうか。小鬼のようにユーモラスで、野武士のように精悍である。エノコログサの穂のように枯草色のふわふわした毛虫は、葉のやわらかい木なら何にでもつく。これはよく見る毛虫だが、どんな成虫になるのかわからず、小さな蛾や蝶はたくさんいるが、その幼虫はほとんどわからない。はっきりわかるものに、クチナシにつくオオスカシバがある。毛のめだたない緑色の幼虫で、サナギになる直前は、大人の小指ほどもあり、おおきな口をあけ、ばくばくと葉を食べる様子は、アニメーションで歌う虫を見るようである。その映像を思い出して、声まで聞こえてくるような気がして見とれているが、歌というのが人間の声だということを忘れているからおかしい。よろこんで眺めていると、クチナシの木はたちまち裸にされてしまう。

カリンが庭の隅のアオギリの下のうす暗がりに身を細めている。接木をしないので実はずけなが、紅葉が美

しいので切らずにいたのが、ふと気がつくとき、黒いからだに白黄色の短い毛をまばらにつけた、五センチから七センチほどもある大毛虫が束になってついていった。枝のまま切って、一匹ずつ土の中へ押しこんだが、緑色の体液で土も緑に染まるように思った。カリンは下の硬い葉を残してすっかり食い尽くされていた。これは何の幼虫だろうか。図鑑で調べただけでは、思い違いや見まちがいがあり、飼育すればいいのだが私の手におえない。

クルミについた毛虫はオビカレハだと思っていた。幼虫が糸を出して天幕を張り群生する様子から、テンマクケムシと言われ、成虫の羽を広げた大きさが、三センチから五センチの白っぽい蛾であることが、一致していたからである。ところが、オビカレハの卵は葉の茎などにリングのように巻いて、規則正しく産みつけられるのであるが、この蛾は、クルミの葉裏にきちんと並んで卵が産みつけられているのであった。

まずこの毛虫が大変な数でわっと出てきたのが、盆の十五日である。雨ばかり降り続いて、毛虫の発生しているのに気がつかなかったのだ。早朝から大急ぎで薬剤を散布してみたが、すでに大きくなっていて、葉は木から毛虫を追い出す働きをただけで、そくそく木を下りた毛虫は、さなぎになるためのまゆを造る場所をもとめ、壁、屋根、窓、バケツ、ありとあらゆる物に上ったり下りたり、みごとに毛虫の乱舞が始まった。

あまりのことにあきれ、部屋の中からガラス越しに見ていると、木から下りてくる毛虫と上って行く毛虫と、出会うのかと思ったら、たくみに避け、すこし離れて平行にすれちがって行く。せつかく下りたのになぜまた上って行くのだろうか、何か忘れ物をしたような様子である。ひさしのとゆをせつせといって行き止り、Uターンしてせつせと帰ってくるもの、そのとゆにひっかかっている落ち葉の柄を先に向かつて伝って行くもの、葉の方

へ帰ってくるもの。柄の先端が空へ突き出ているので飛び立つわけにいかず、やっぱりくると向きを変えて戻ってくるより仕方がないのであろうか。風呂場の壁には、忙しげに、目あてでもありそうに、むやみと歩きまわる毛虫が入り乱れ、数えるいとまもない。

毛虫の体は黒っぽいのだが、長くて白い毛でおおわれているので、遠くから見ていると、ネコヤナギの花が咲いているように見える。

壁を歩いているのは、ほうきで落として踏みつぶした。お盆だということにこんなに殺生してはもう地獄行きだなあと思いつながら、これがみんな蛾になって、また幼虫が生れることを思うと、少しでも減らしておかなければクルミの木が枯れるだろうと気が気でない。もう寺の大屋根のひさしの下や、屋根裏部屋のガラス窓まで上ったものはどうしようもない。うごくネコヤナギの花さかりである。

また降り出した雨に、あきらめて、この毛虫の舞踏会を眺めていた。時にはどこからもぐりこんだものか、部屋の中までぼろんところげ落ちる毛虫もいる。四日ほどして、だんだんと毛虫の姿が見えなくなったと思ったら、数日後、三センチほどの白い蛾が、電燈の光りにさそわれて、窓ガラスや網戸の外にはりつき、無言の抗議でもするように、白い腹を見せて並んでいる。その数がまただんだん増えてくる。たくさん並べられると気味が悪くて、今度は殺虫剤のスプレーを持ってきて、撃退する。死んだのか逃げたのかひとまず見えなくなる。ああこんなに殺していいのだろうか。

冷たい夏、なんともきらびやかな毛虫たちであった。熱心なクリスチャンである友人Mさんは、「汝殺すなか

れ」は、「殺されるなかれ」をも意味するのだと言っている。それでは毛虫の奥様お手をどうぞ、ご一緒にさあ地獄まで。

輝

き

舞

う

1988.9.20.

原 田 慶

彼岸の中日は、少しむし暑いがまずまずの天気だった。いつもより早くから咲き出したヒガンバナが背を伸ばし、フヨウもたくさんの花を咲かせた。玄關の障子をいっばいに開けるとちよと白いフヨウとピンクのフヨウが粹にはめたようにびたりとはいる。

奥に座って眺めると、秋の明るさ、静かさが、ずっと中まで染み入ってくるような気がする。

この美しい彼岸会は、九月に入るともう、私の心を何となくそわそわさせる行事である。

お赤飯を注文して、お供えやお供養の乾物を買って、今年のホウレン草は彼岸までにどれだけ大きくなるだろうかと店先をのぞきに行く。ナシのときはどうだろう、どの大ききのを買えばいいだろうかと計算する。スーパーマーケットでは、ちよとこの季節になると、こや豆腐、しいたけ、あらめ、しょうゆなどの必要な物を安売りしてくれる。今年のお供養は少し変わった物を入れようかと考えてみるが、思案した結果、毎年同じお弁当になる。考えるだけ無駄なのにいつも考える。それぞれの必要量を決めて品物を注文する。

庭の掃除をして、本堂のまわりのガラス戸を磨いて、台所を掃除して、道具類をしらべる。何か忘れていない

かと気になる。若い頃にはその場になってからでも飛び出して駆けて行って買ってくれば間にあった。今ではとても無理だから、早くから少しずつしておくのである。

今年は、いつも手伝って下さる方が、間際になって都合がつかなくなった。当てにしていた娘の道子も、二十一日の夜になって四十度の熱を出して寝込んでしまった。とうとう彼岸会の裏方は私一人になった。急なことなので、他の人にお願ひせず、もし間にあわなかったら、お参りにこられた方に頼むことにした。むし暑いので食べ物や前日に作ることはできない。

すっかり準備して、よいスタートというところまでで少し眠った。朝四時から仕事を始めて、煮物、漬け物、果物、出来上がったのが九時過ぎである。いつもなら十時までにお弁当を詰め終わって、私達も法要に出るのだが、今日は間に合わない。どうかお経がゆっくりでありますようにと念じながら詰めているのに、いつもより早くお経が進んでいくような気がする。お焼香の時間の長さで参っている人の数が見当がつく。法要の始まる前が、ずいぶん静かだったから、少ないのだろうかと思っていたが、焼香はそんなに早く終わらなかった。特に長くもなかったがとにかくその時間でいぶお弁当が詰められた。五十人余りと見当をつけ、六十箇を詰め終わった頃、法話と聖歌がすんだ。総代のNさんはピアノの名手である。いつもは道子のする聖歌の伴奏を、今日は引き受けて下さった。

「ではご一緒にお供養を頂くことにしたいと思います」という声が出た時、こちらの準備がすっかり整った。いつものように、お参りに来ていた子ども達が出て来て、みんなの所へお弁当を運んでくれる。お茶を入れて配

ってくれる人もある。家族や顔見知りの人が話しをしながら、なごやかなお供養の時になる。私を見た人が「奥さんおいやしたんどすか、いつも法要に出といやすのに、今日はちよつとも見えしまへんでしたさかい、ご病気かと思つてました」と言われた。

六十箇のお弁当は六箇のこつた。ああできた、間に合つた。私はうれしくて、しみじみとこんなに正直にうれしいと思つたことはなかつた。注文した品物を、きちんと届けてくれた花屋さん、餅屋さん、八百屋さん、もちろん、それを作っている人々も、手伝ってくれた人もお参りに来てくれた人もみなさん、おおきにおおきに、しんどかつたけど本当にうれしいお彼岸でした。九月は私にとってそっくり一カ月お彼岸だったような気がする。

：四十五年は、劫というような時間の前ではゼロにひとしく、わたしの命だつて微塵にさえ当たらぬが、微塵も光りに照らされれば輝き舞う。(『方向』八八号二三頁)

私たちも、宇宙の塵のかげらにはちがいない、ほんの一瞬、光りに触れれば輝き舞うこともあるのかもしれない。そう思うだけで何だかうれしい、そう考えるだけで晴ればれとして楽しくなる。今日の京都は久し振りに、洗つたように美しい秋の一日であつた。

名声を求めると怠けボサツ

一法華經巡礼 211 1988.9.28. 原田憲雄

1.45. さてアジタよ、世尊、日月燈明如来、尊敬されるべき、正しい覺りをえたひとは、夜の半ばに心身を余さ

ず滅ばし、完全な涅槃に入った。そして妙法蓮華の法門を、あの妙光ボサツが保ち続けた。あの世尊が完全な涅槃に入った八十中劫、その教えは妙光ボサツ大士が保ち、説きあかした。そのとき、アジタよ、あの有意をはじめとする世尊の八人の子らは妙光ボサツの弟子となった。かれらは、かれにより、成熟し、無上の正しい覺りに向かい、そのうち幾千万億の多くの仏に会い、奉仕した。すべてかれらは無上の正しい覺りをひらいた。その最後の者こそ、燃燈如来、尊敬されるべき、正しい覺りをえたひとであった。

atha khalv ajita sa bhagavāṃś candraśūr'ya'pradīpas tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddhas tasyāṃ eva rātr'yaṃ madhyame yāme 'nupadhisese nirvāṇadhātavaṃ parivrttāḥ / tam ca saddharmapuṇḍarīkaṃ dharmaparyāya sa varaprabho bodhisattvo mahāsattvo dhāritavān asītim cāntarakalpāṃs tasya bhagavataḥ parinirvṛtasya śāsanāṃ sa varaprabho bodhisattvo mahāsattvo dhāritavān saṃprakāśitavān / tatra ajita ye tasya bhagavato 'stau putrā abhūvan mati-pramukhas te tasyaiva varaprabhasya bodhisattvasyāntevāsino 'bhūvan / te tenaiva paripācitā abhūvan anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau tais ca tatab pascād bahūni buddha-koti-nayuta-sata-sahasraṇi drśtāni satkṛtāni ca / sarve ca te 'nut-tarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambuddhāḥ pascīmakas ca teṣāṃ dipakaro 'bhūt tathāgato 'rhan samyak-sambuddhah //

燃燈仏、ディーバンカラ、については『因縁物語』（ニダーナカタ、南伝二八）に次ぎの話しを伝える。
昔アマラヴァティ（不死城）という都にスメーダ（善慧）というバラモンが住んでいた。道を求めて出家し、

燃燈仏が来られると聞き、道路の修理に加わっていた。直し終わらぬうちに仏の姿がみえたので、髪を解き、身を泥に伏し「仏よ、私の背を橋としてお渡りください」といった。燃燈仏はこれを聞き、群衆の前で予言した。「スメータ行者は仏となる決心をしている。その願いはかならず達せられ、四アサンキヤ十萬劫の後、ゴータマという仏となるであろう」と。

この話しは、「ブツダヴァンサー」「デーバンカラ品」のほか、南北両伝の諸經にみえ、赤沼智善「燃燈仏の研究」にくわしく、過去仏信仰の発端となったものらしい。いずれにせよ、「法華經」では、光りを放つ者としての仏の系譜がここに示されているのは明らかだが、反面から察すれば、人間世界が闇のうちに没しているとの深い悲歎がこの經の成立を支えていることを物語るのであろう。

一、¹⁰⁵ それら八百人の弟子の中に一人のボサツがいた。ひどく利得を重んじ、知られることを重んじ、名声を欲しがりはしたが、教えられても教えられても、言葉も文字も消えて残らなかつた。かれは求名と呼ばれるようになった。ではあつたが、善根により、幾千萬億という多数の仏を喜ばせた。喜ばせて、恭敬し、師事し、尊重し、供養し、贊嘆し、崇拜した。さて、アジタよ、きみは期待し、ためらい、疑うだろうか。その時そこで説法した妙光というボサツ大士は、別のひとだと。だがそう見るべきではない。それはなぜかという、わたしこそ、その時そこで説法した妙光というボサツ大士だったのだから。そして求名というボサツがいたね、怠け者といわれたボサツさ、きみこそ、アジタよ、その時そこにいた求名というボサツだったのだ、怠け者の。

tesām caṣṭānām antevāsi·śātānām eko bodhisattvo 'dhimātraṃ lābha·guruko 'bhūt satkāra·guruko
 jñāta·guruko yasaskāmas tasyoddistoddistāni pada·yañjanāny antardhiyante na saṃtisthante sma/
 tasya yasaskāma ity eva saṃjñābhūt / tenāpi tena kuśalamūlena bahūni buddha·koti·nāvuta·śata·
 sahasrāny āragitāny abhūvan / āragayitvā ca satkṛtāni gurukṛtāni mānitāni puṣitāny arcitāny
 apacāyitāni / syāt khalu punas te 'jita kankṣā vā vimatir vā vicikitsā vā / anyāḥ sa tena kālena
 tena samayena varaprabho nāma bodhisattvo 'bhud dharmabhāṅakāḥ / na khalu punar evam
 drastavyam / tat kasya hetoḥ / ahaṃ sa tena kālena tena samayena varaprabho nāma bodhisattvo
 mahāsattvo 'bhud dharmabhāṅakāḥ / yas' cāsan yasaskāmo nāma bodhisattvo 'bhūt kausīdya·prāptāḥ/
 tvam evajita sa tena kālena tena samayena yasaskāmo nāma bodhisattvo 'bhūt kausīdya·prāptāḥ /

人間世界が闇の内に没していると、なぜ嘆くのか。

人間の多くは、ひどく利得を重んじ、知られることを重んじ、名声を欲しがりはするが、教えられても教えられても、教えは、人間の頭にも胸にも刻まれず、言葉としても文字としても、跡形もなくなる傾きにあるためである。

エゴで固められた貪著は、貪著するにもかかわらず、エゴ以外のものを受け入れる余地空間はない。外からの教えはエゴに浸透することなく、エゴの外に流れ落ちる。貪著とむすんで表裏をなす忘却は、実は沁みこむこともなく発散した教えであって、初めから、教えられる者にとっての教えにさえなっていない。そのように他のな

にもものをも受け入れることのない、鉛の塊のようなエゴである人間のぎっしりつめこまれた世界は、外から照らす光りをはねかえし、闇そのものとなつているのである。

「今の若い者は」とひとはよくいう。いうのは年配の人であり、いうところは確かにその理はある。しかし年配の人が若かつた頃、当時のさらに年配の人が「今の若い者は」といったのであり、やはりその理はあつたので、さきの理とあとの理を、もし比べれば、ほとんど大差はない。年配の人の嘆きは、今に始まつたものではなく、文字で記録されたもつとも古い文献にすでにみえる。現にわたし達が『法華経』を読みだしたとき、仏弟子のなかに釈尊の教えを聞かぬ六群比丘を見、長老の比丘が若いシャミ達の放埒を嘆くのを聞いたではないか。理と理は相似ても、差し出す者と受け取る者とは、意味が変わり、同じ人における同じ理も、時を変えると、違った味となる。だが、そうしたこともおおむねは忘れられ、似た論議がことごとく繰り返されているのが、これまた人間世界の暗さなのではないか。

弥勒にむかつて「きみこそ、アジタよ、その時そこにいた求名というボサツだったのだ、怠け者の」という文殊の言葉は痛烈だが、弥勒への個人攻撃ではなく、貪著と忘却という人間のエゴの両面に対する批評なのだ。

もし貪著がなければ、弥勒は忘却しなかつたらう。もし大衆も忘れていなければ、弥勒は代表して質問する要はなかつた。もしいっさいの有情が日月燈明如来の説法を忘れていなければ、いま釈尊が『法華経』を説く必要はなく、光りを放ち天地に六種の震動をおこさせる縁りもない。

だが、そんな仮定は夢でしかなく、人間はあくまで貪著であり、エゴの塊であり、自分に都合の悪いことはた

ちまち忘れてしまい、忘却のなかでぼうぼうとおのれのエゴを化粧しながら醉生夢死する存在なのだ。

ここでの弥勒の役割はピエロのようにおかしいが、ピエロは、実はおかしがるこちらであり、弥勒はそのおかしさを目に見えるよう、演技してくれているのだ。

人間の多くが、そのように貪著で、忘却しやすい存在だとして、それでも人間が醉生夢死からさめるほうがよいとすれば、闇の塊の人間のなかに覚醒の機縁を見出すほかはなく、衆生の覚醒を助けるのが仏ならば、仏は鉛の塊のような人間のエゴの闇のなかにこそ、光りを貰かねばならないのではないか。ボサツが仏の子であり、仏の使命を助けなければならぬのだとすると、人間の貪著と忘却の中にみずから進み入り、その愚かさと滑稽をどん底まで味わうことも、修行のひとつの様態であつてよい。

釈尊は、覺りをひらいたとき、その覺りを人には語るまいと思つた、という。覺りの内容が、人間の常識に反するもので、語つても決して受け入れられるものでないことを、知り尽くしていたからだろう。にもかかわらず、それを語ろうと決意したのは、おのれもまた人間であり、おのれの内なる貪著と忘却を見つめ、人間の共有する闇をふかく味わっていたから、いま到達した静寂と光明とを、人々にも分かちたかったのであろう。

語つても理解されがたいにしても、人間であるおのれが覺つたものなら、やはり人間のなかに覺る者があるだろうという、信頼もあつたであらう。

歴史上の釈尊の心事は、知りえないとするのが事実であらうが、遺された經典から察する限り、悟りの可能性への信頼は確かである。

伝道を始めてからの釈尊が、弟子達の愚かな騒ぎを厭って、しばしば群れを離れ、林中で三昧に入ったが、また帰ってきて、弟子達を捨て去ることがなかったのは、人間への慈悲と信頼によるとしか考えられない。

かれの弟子達、ことにシヤカ族出身者には、傲慢で虚栄心にみちた青年が多かった。かれをもっとも煩わせたのがかれらだったといってもいい。しかし、そのかれらも、師に叱られ、兄弟子になだめられているうちに、鉛のような貪著にヒビが入り、忘れやすい心にもザルの底に沈むかすかな砂金のように、教えがかがやくこともある。それらを見ながら、不可能と見えることも可能にする教育の力を、見直していたのではなからうか。

一47. というようなわけで、わたしは、世尊がこのような光りを放つ前兆を見て、こう考える。世尊もまた「妙法蓮華」という法門、広大な經典、ボサツ達への教示、すべての仏の護持されるものを、説こうとしているのだ、と。

さて、文殊少年は、このような意味を、同じように示そうとして、このときつぎのように詩を述べた。

iti hy ajitāham anena parvayenedaṃ bhagavataḥ pūrvanimittaṃ dr̥ṣṭvairāvānūpāṃ rasmin utsr̥ṣtam
eva parimāṃse yathā bhagavān api taṃ saddharmapundarikāṃ dharmaparyāyaṃ sūtrāntaṃ mahāvaiṇu-
lyam bodhisattvāvādaṃ sarva-buddha-pariśrahaṃ bhāṣitukamaḥ //
atha khalu mānūśriḥ kumārābhūta etaṃ evārthaṃ bhūyasya mātrāyā praderśayamāṇas tasyāṃ velāyāṃ
imā gāthā abhasata //

※本号正誤 八頁 一行 湧き上ったではないか ↓ 湧き上ったのではないか